

大津祭人形に豪華和紙

湖国三大祭りの一つ、大津祭（大津市）の曳山^{ひきやま}に載せるからくり人形の衣装に、欧州伝来の高級装飾革「金唐革^{きんたうかく}」の模様似せた、江戸時代中期の作とみられる特殊な和紙が貼られていることが、大津市などの調査でわかった。金唐革風の「革紙」を作る技術は明治時代に確立したが、それよりも100年以上前に模造する動きがあったことを示す発見で、専門家は「財政力豊かな当時の町の繁栄がうかがえる」としている。

（林華代）

金唐革紙は、和紙に金銀の箔^{はく}を施し、凹凸で文様をつけた素材。城郭や邸宅の壁面装飾として欧州では18世紀末頃にかけて、革に型押しして華麗な文様をつけたきらびやかな金唐革が出回っていた。金唐革は当時、高級な素材で、日本ではこれに近い素材を模索する中で革紙が編み出された。



欧州伝来「金唐革」に憧れ？



大津祭で巡行する孔明祈水山の趙雲人形（右）（2015年10月、大津市で）

明治確立の技 江戸中期に模した動き

今回、確認された紙は、曳山「孔明祈水山」（中堀町）に載せる趙雲人形がまとった鎧の素材として使用。地元に残る記録には安永5年（1776年）に衣装を新調したとある。革紙の製法が確立したのは明治以降で、輸出品として人気を博したのも100年近く後だ。

人形衣装の修理に合わせた蛍光X線分析の結果、金のほかに、黒漆の成分である鉄、顔料を混ぜた色漆に含まれる水銀が検出された。金箔を貼り、黒漆や赤などの色漆で模様を描いていたとみられる。一方で明治期の製法である型押しによる凹凸は施されていない。

江戸期の革紙は、作製を試みた学者の平賀源内の1点が現存しているが、他にほとんど見られないという。

江戸時代の東西交流史に詳しい中之島香雪美術館の勝盛典子さんは「金箔と漆を用いた豪華な鎧で、祭りを華やかにしようという大津の町衆の心意気や、金唐革への憧れが垣間見える。さらに研究を深め、この紙を使った背景などを解明してほしい」と話す。

11日午前11時半からは大津市の大津市民会館で、からくり人形の衣装の分析・修理報告を実施。10月8日の宵宮にお目見えする。